

一乗谷朝倉氏遺跡

県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査報告

1992

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

目 次

	頁
序	
I. 遺跡の概要 ……………	2
II. 調査の経過 ……………	5
III. 遺構	
1. 平成2年度立会調査 ……	6
2. 第76次調査 ……………	8
3. 第80次調査 ……………	12
IV. 遺物	
……………	13
V. ま と め ……………	20

例 言

1. 本報告書は、県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査として実施した、第76次調査(平成3年度)、第80次調査(平成4年度)の報告書である。
2. 調査は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の隣接地であって、一連の遺構の存在が予想されたため、福井土木事務所の委託を受け、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が実施した。
3. 発掘調査は、資料館主任文化財調査員の水野和雄、同吉岡泰英、主査月輪泰が担当した。また、平成2年度の立会調査は、主査南洋一郎が行った。
4. 本報告書は、I、II、III、Vを吉岡泰英が、IVを月輪泰が執筆し、吉岡が編集した。
5. 本報告書に用いた遺構平面図はアジア航測(株)作成の航空写真測量図(1/50)による。また、座標系は「第VI系」である。

序

近年、特別史跡に指定されている一乗谷朝倉氏遺跡の周辺でも、道路の拡幅や改良などの事業が多くなってきている。福井県では全県的な遺構、遺物の分布調査を再度実施したが、開発工事による遺構の破壊を防止するためにも、遺跡の広がりを見極めながら、特別史跡の指定範囲の拡大が望まれる。

朝倉氏遺跡の発掘調査は、これまで城戸ノ内が中心であったが、城下町の全容を知るためには城戸の外の調査も必要不可欠なものであり、今回の発掘はその良い機会であったともいえる。

発掘調査の結果、やはり城下町は安波賀地域まで連続して広がっていたことが判明した。線的な狭い範囲の発掘で、遺構の規模など不明な点多かったが、数多く検出された石列や石積施設、溝、道路、また城戸ノ内と同じような割合で出土する遺物などから、城戸ノ内と同様な遺構、また往時の生活を推察することができよう。

山側にはもっと遺構が残存している可能性もあり、今後西山光照寺跡などの発掘調査も計画しているが、なお一層安波賀地域の調査研究を進展させたい。

なお発掘調査の実施にあたり、関係各位には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げる次第である。

平成 5 年 3 月

一乗谷朝倉氏遺跡資料館長

藤 原 武 二

I. 遺跡の概要

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が5代約100年間(1471～1573)、領国支配の拠点とした所である。越前平野の東南部、九頭竜川水系の一つ足羽川の中流に注ぐ一乗谷川の造る狭い谷地形を中心に遺跡は分布する。谷の入口と中程に濠と土居により構成される城戸を設け、この内が「城戸ノ内」と呼ばれ、城下の中心となる。また、谷の東の山稜上に防禦の中心となる山城を構え、また、周辺の山稜等に成願寺城・横山城・三峰城等の支城や櫓等を配し、守りを固めている。この外、これらの外縁部となる平野部の東、山稜裾部には、朝倉街道と称された北陸道の脇往還を整備すると共に、足羽川を用いた水運や、これに沿って存在した美濃街道等の交通上の要路もみられる。そして、城戸ノ内には、当主の館・一族の居館・家臣団屋敷等が整然と遺存することが地形等からうかがわれ、1971年、その主要部278haを国の特別史跡として指定保存することが決定した。これを契機として、足羽町(現福井市)が着手した当遺跡の調査・整備事業を発展的に継承し、史跡公園として整備・保存を計る諸事業が現在も進行している。

四半世紀を超えるこれまでの調査研究により、多くの貴重な成果が得られている。その支柱である発掘調査事業は、現在まで、約9haを実施し、家臣団屋敷のみならず、極めて多数の町屋と推定される小区画の存在を確認した。これらの各屋敷は、計画的に造られた道路を骨格として配されていたことも判明し、戦国期の都市として一乗谷があった事実が明らかとなった。加えて、質・量共に豊富な出土遺物の存在は、当時の人々の生活の実態を浮かび上らせつつあり、各界から注目されている。こうした調査の進展は、改めて、指定保存されている主要部のみならず、周辺部を含めて考え直すことの必要性を浮彫にしており、こうした周辺部を含めた遺跡の全体像の解明が急務の課題となって来ている。

今回の調査対象となった安波賀地籍は、一乗谷川と足羽川の合流域附近、かつ足羽川が山間部から平野部へ出る所で大きく流れを転換する地点に当る。戦国期にはこの辺まで川舟が登り、津が存在したと伝えられ、また、近年の文献等の研究から城下町一乗谷における流通交易の拠点の可能性も指摘され、注目される地点である。加えて、山裾部には天台宗真盛派の一乗谷の拠点であった西山光照寺跡等も存在する。このように、安波賀地籍は、その本格的な調査の必要性が高まっている重要な場所である。



図1 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡とその周辺地形図

(福井都市計画図1981より)

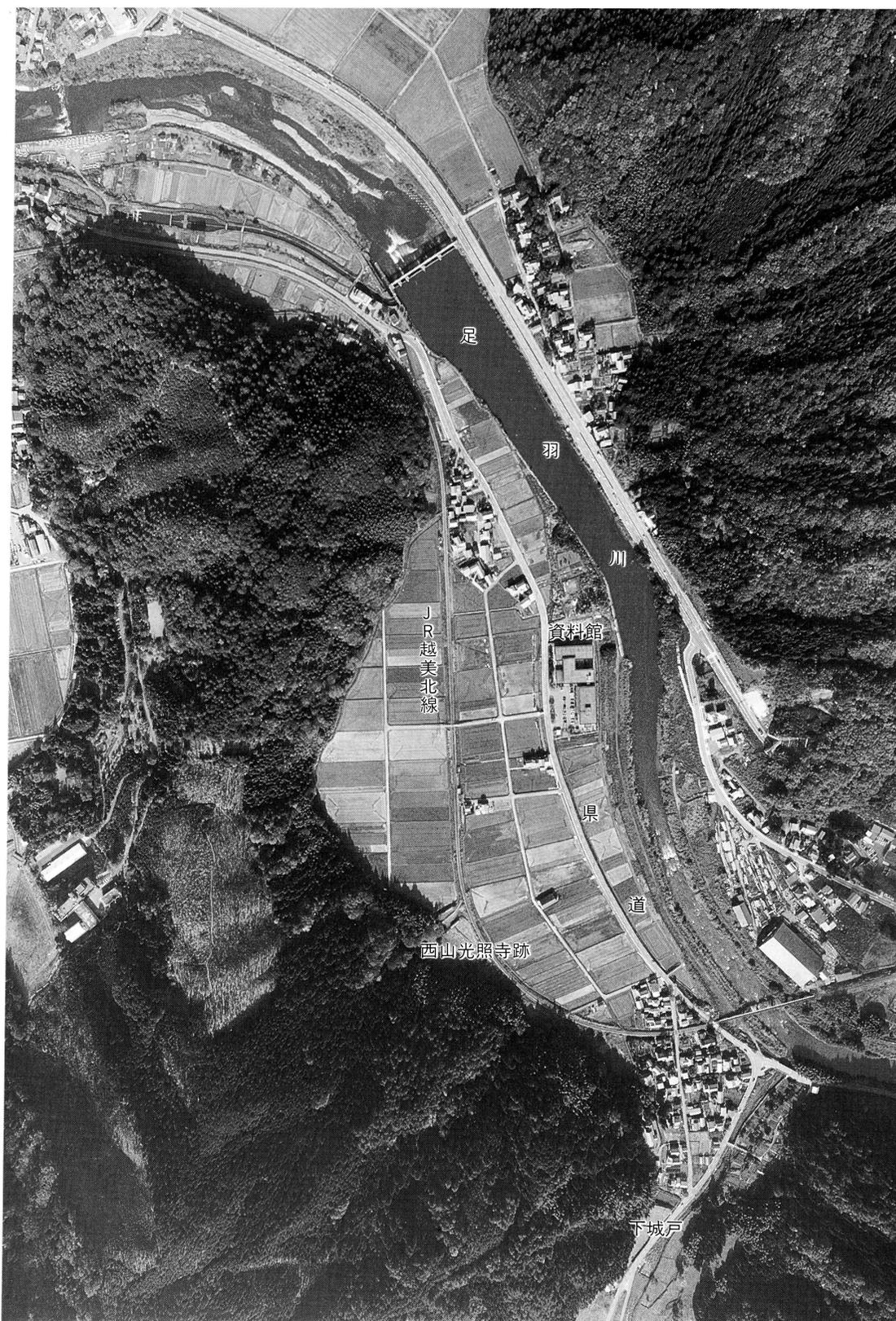


写真1 調査地全景航空写真

(アジア航測(株)撮影1991)

II. 調査の経過

近年の自動車を中心とする社会構造の変化から、遺跡内を縦貫する道路に対し、谷内で生活を営む住民や増加する遺跡見学者のために、その幅員の拡幅や歩道の設置等の改良事業が進められている。一乗谷朝倉氏遺跡資料館前を通過する県道篠尾・勝山線についてもこうした改良工事が計画・着手されて来た。史跡指定地外であり、かつ周辺はすでに農業構造改善事業が実施されていたため、工事関係者にとって事前調査の必要性の認識はなく、工事が進行した。しかし、我々文化財関係者の内では、遺構の存在と工事に伴う破壊の危険性も指摘されていたが、この県道が地籍図等から足羽川の旧氾濫原との境に位置することもあって発掘調査が具体化していなかった。しかし、1991年冬、2月に入り、工事に伴って掘削された土に遺物が散見され、また、断面に焼土層も認められたため、当資料館でその対応を協議し、2月15日、県文化課、県土木部へ連絡を取り、善処を求めた。早速、関係者で協議した結果、今年度工事分については、すでに大半の掘削が終了していることもあって、資料館で現状の立会調査を行うこととし、次年度以後の施工分については事前の発掘調査を実施することに決定した。

今回の改良事業において遺構の存在の可能性が予想された所は、福井市安波賀町及び同安波賀中島町の2つの集落の間、約500mであり、これが平成2年度から3ヶ年で実施される計画であった。そこで、前述したように、平成2年度分に関してはやむを得ず、立会調査となり、2回実施した。平成3年度分は、延長約160m、面積約500㎡で、1991年秋に約1ヶ月を要して発掘調査を行い、全域で遺構を検出した。平成4年度分もほぼ前年度と同規模で、1992年秋に発掘調査を実施したが、大半が旧河川域と考えられ、明確な遺構は検出されなかった。

調査日誌抄

- | | |
|---------|--|
| 1991年2月 | 道路改良工事着工。掘削土中に遺物散見。 |
| 2月15日 | 関係機関と対応を協議。 |
| 2月18日 | 第1回立会調査。 |
| 2月22日 | 第2回立会調査。 |
| 10月14日 | 平成3年度工事区域事前発掘調査（第76次）開始。
道路法面及耕土を重機により除去。 |
| 10月21日 | 地区杭設定。遺構検出作業に着手。 |

- 10月28日 農業構造改善事業により約1 mの盛土がされていることが判明。これを重機により除去する。
- 10月29日 43～49グリッドに於て遺構を検出。
- 10月30日 40グリッド以南においてもほぼ全域で遺構を検出。
- 11月7日 遺構検出作業終了。
- 12月16日 空中写真測量及遺構写真撮影実施。第76次現場作業終了。
-
- 1992年11月10日 平成4年度工事区域事前発掘調査（第80次）開始。
重機により盛土等を除去。
- 11月13日 遺構検出作業に着手。
- 11月16日 地区杭設定。大半が河川氾濫による砂利層であることが判明。
確認の深掘トレンチを設定。
- 11月19日 発掘作業を終了。
- 12月21日 土層図作成。
- 1993年1月8日 調査区地形平面測量実施。
- 1月20日 測量終了。

Ⅲ. 遺 構

1. 平成2年度立会調査

安波賀集落より約160 m分が工事区域であったが、工区は4分割し、分離発注されており、工事の進捗状況は異っていた。工事に伴う掘削工事の土砂中に遺物が含まれていること、断面に焼土面や遺構の一部と推定される河原石等がみられたことから、工事の一時中止を求め、関係者との協議を行った。しかし、この時点では、すでに大半の掘削が終了し、ある工区では基礎コンクリートの打設も実施されているという状況であった。加えて、2月という厳冬期で、発掘調査は困難であるため、掘削面と断面土層の観察を主とする立会調査を実施することとなった。以下、その概要を述べる。

工事による掘削深度は、0.8 m程である。基本的には、現水田面の下層は、旧水田耕作土と遺構・遺物包含層に大別される。すなわち、この付近は、一乗谷朝倉氏遺跡の保存の契機となった昭和40年代の農業構造改善事業に際しては盛土が主体で、削平・攪乱をまぬがれて、遺構が存在することが明らかとなった。検出した遺構は、建物礎石、石列、焼土ピット、砂利敷等である。遺物は、工事作業員が採集したものを含め、テン箱2杯程であ

る。立会調査位置図（図2）に示したアルファベット（A～D）は工区を、数字（1～5）は顕著な遺構群がみられた地点である。A-1では石列と焼土ピットが確認された。A-2では礎石及び砂利敷面がみられる。B-3は礎石・石列等が特に集中して確認された。C区は基礎コンクリートの打設をほぼ終了していたため、断面の観察のみであるが、図2に示すように石列等が確認された。D-5では礎石等がみられた。

全体を通して見れば、遺構は、現水田面下0.5～0.8m程に存在している。また、所によっては、西の山裾部を削平し、客土されたと判断される遺物・焼土を含む土砂が現水田面にみられることも判明した。



写真2 B-3 検出石列



写真3 C-4 検出西壁石列

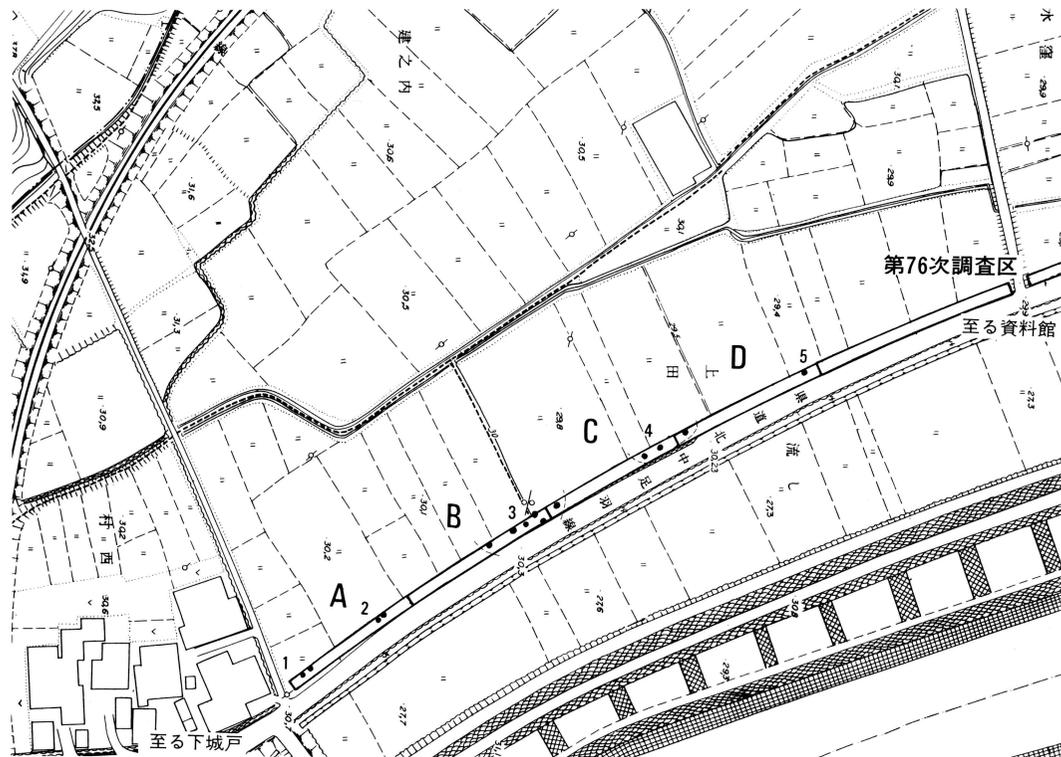


図2 平成2年度立会調査位置図

2. 第76次調査

調査区は、安波賀及び安波賀中島の両集落のほぼ中間に位置する福井市安波賀町字水窪地籍、県道に沿う西側、幅約3m、延長約160mである。現水田耕土直下で一部遺物がみられたが、これは先の農業構造改善事業に伴う盛土であること、加えて盛土厚が0.4~1m程みられることが判明した。そこで、この盛土については、機械により除去し、その後に遺構の検出作業に着手することとした。ほぼ調査区全域に、良好に戦国期の遺構が残存することが確認された。

検出した主な遺構は、溝2、石積施設3、道路1、石列3等である。これらの遺構について、南から順に述べる。

S X 4110 長径0.2~0.3mの自然石が東西に並ぶ石列状遺構である。約1.2mにわたり検出したが、まだ延びる可能性も考えられる。

S X 4111 石敷遺構で、一辺が約1mの方形と推定される。主に笏谷石を用いている。この遺構の東約0.5mに平行する長0.7m程の南北に長い石も密接な関係があると思われる。

S F 4106 石積施設である。東西約1m、南北約1.5m、深さ約0.5mの規模を持つ。北面の保存度が最も良く、3段の石積がみられる。

S V 4107 東西方向石列。径0.2~0.3mの自然石を用いている。この石列と平行して、北に石列状の遺構がみられる。その間隔は約0.5mである。さらに北には、少し先行すると思われる石列状遺構S X 4112もみられる。いずれも南に面を持っている。



写真4 S X 4111 (東から)



写真5 S F 4106・S V 4107 (東から)

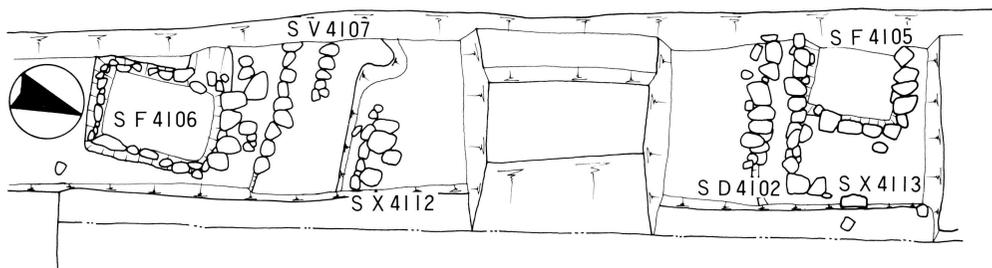


図3 S F 4106・S V 4107・S D 4102・S F 4105 平面図 (1/100)

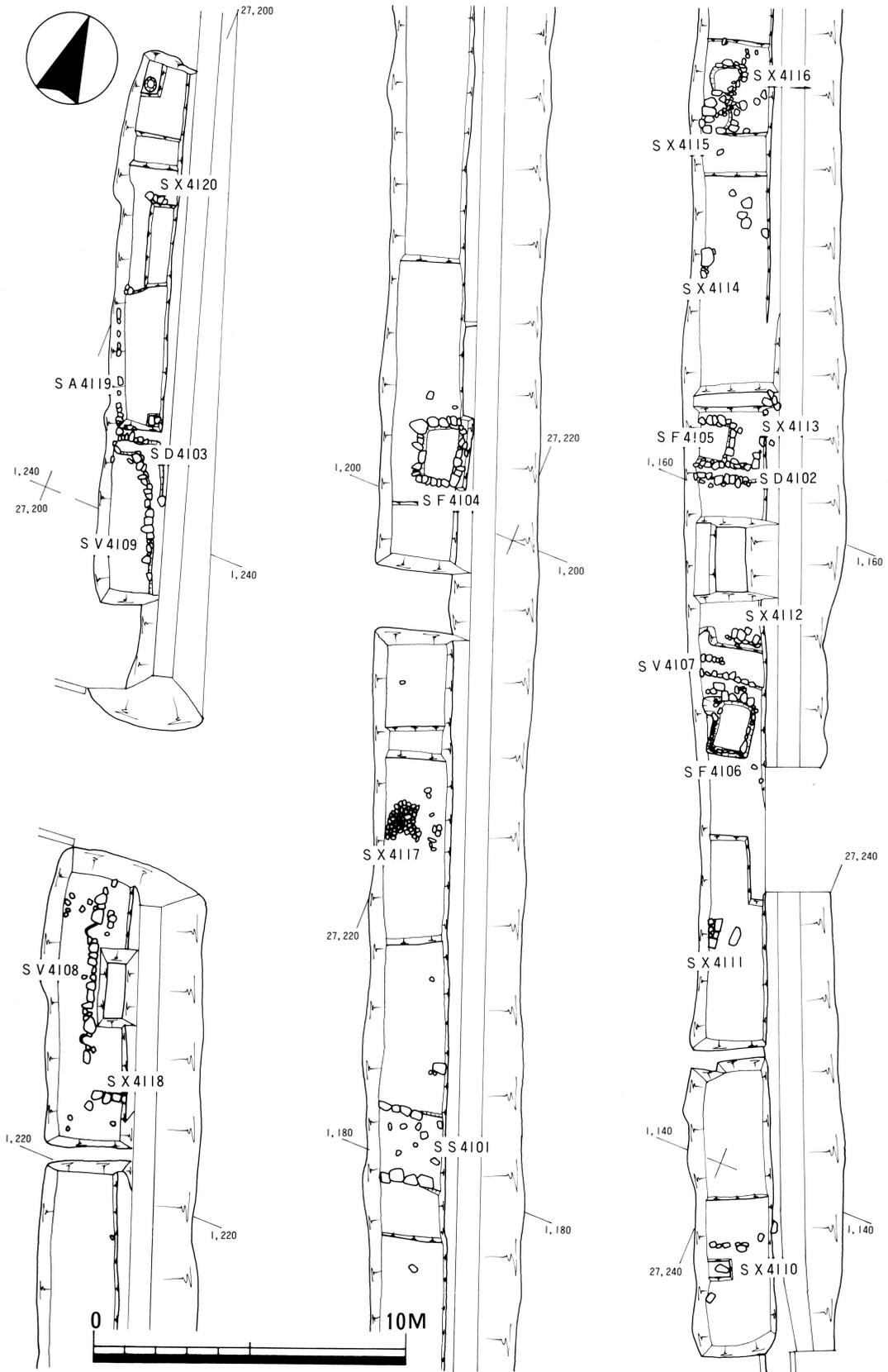


図4 第76次調査区全測図 (1/200)

S D4102 東西方向の石組溝。幅約 0.2 m、深さ約 0.2 m。東端に北へ延びる石列状遺構 S X4113がみられ、北へ折れ曲がって延びる可能性も考えられる。

S F4105 石積施設。東と北の石積を検出しており、南面は溝 S D4102に接しており、この石が兼ねている。南北約 1.2 m、西南は検出しておらず東西長は不明。深さは約 0.4 m。

S X4116 炉状遺構。深さ 0.2 m程、石を 1～2 段に並べている。西面は不明。南北約 0.8 m。内部に灰層がみられた。南の S X4115は、性格は不明。

S S4101 東西方向道路。幅約 2.4 m。北と南に径 0.3～0.5 m程の扁平な石を並べ、内は礫・砂利で良く固めている。

S X4117 石敷遺構。径 0.1 m内外の自然石を敷き並べている。



写真6 S D4102・S F4105 (東から)



写真7 S X4116 (東から)

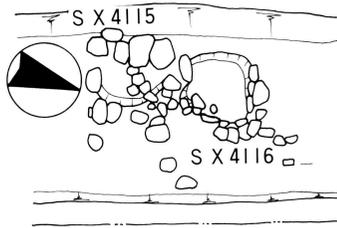


図5 S X4115・4116平面図 (1/100)



写真8 S S4101 (東から)

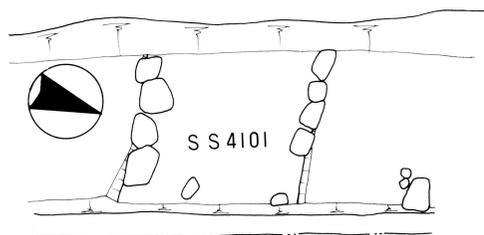


図6 S S4101平面図 (1/100)



写真9 S X4117 (東から)

S F 4104 石積施設。東西約 1.2 m、南北約 1.6 m、深さ約 0.6 m の規模を持つ。2 段に自然石を積んでいる。

S V 4108 南北方向石列。約 6 m を検出。さらに北へ延びていると思われる。径 0.3 ~ 0.5 m 程の扁平な石を東に面を持って並べている。南の東西方向の石列状遺構 S X 4118 との関連も考えられる。

S D 4103 石組溝。深さ約 0.2 m、幅約 0.3 m。東で石列 S V 4109 に沿って南に折れ曲る。また西も同様に発掘区西壁にみられる石列が溝



写真11 S V 4108 (北から)



写真10 S F 4104 (東から)

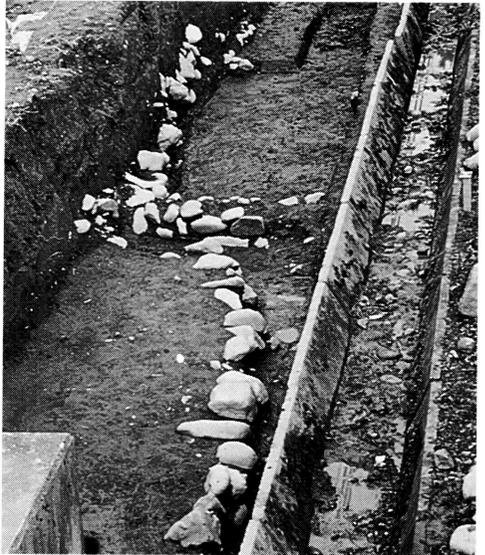


写真12 S V 4109・S D 4103 (南から)

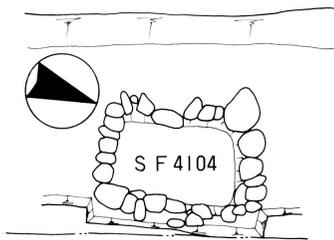


図7 S F 4104平面図 (1/100)

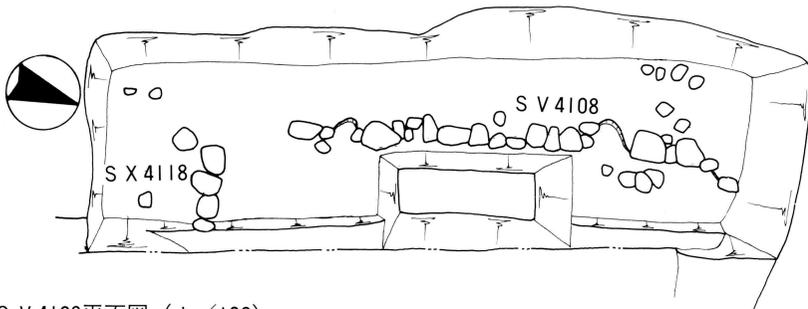


図8 S V 4108平面図 (1/100)

の側石となって北へ折れ曲る可能性も考えられる。

S V 4109 南北方向の石列。前述したように溝 **S D 4103** の側石を兼ねている。また、南の南北の石列 **S V 4108** とほぼ方向が一致することから、これと繋っていることも考えられる。



図9 S V 4109・S D 4103平面図 (1/100)

3. 第80次調査

調査区は、当資料館脇で、福井市安波賀町字鏡屋地係に位置する。県道に沿う幅約3m、長さ約165mが調査対象地である。まず、現水田の耕作土を調査員立ち会いのもと、機械により慎重に除去し、その後に遺構検出作業を実施した。その結果、現水田は、先の構造改善事業により盛土造成され、旧水田床土が約0.4m下に存在するものの、その下層は、遺物を若干含む砂利・砂層となっており、顕著な遺構は存在しないことが判明した。さらにこの砂利・砂層の断ち割りを9ヶ所で実施したが、足羽川の氾濫原と考えられる良く締った砂利層が続くのみであった。明治初期の地籍図を見ると、ほぼ現在の県道付近を境にして、川原を開田したと考えられる水田が拡っており、今回の調査対象地は、足羽川による浸喰地と推定された。



写真13 調査前状況 (南から)



写真14 土層断面 (東から)

IV. 遺物

今回の一連の調査の内、立会調査を除く第76次、第80次調査で出土した遺物は、総破片数4,828点を数える。内訳は、表1に示したとおりである。第76次調査では、朝倉時代の遺構が検出され、それに伴う遺物も多数出土したが、第80次調査では遺構が検出されず、遺物も113点と少なかった。これらの内訳を陶磁器類に限って見た場合、土師質皿を主とする土師質土器が最も多く、次いで越前焼、中国製陶磁器、瀬戸・美濃焼、その他の順となり、朝倉氏遺跡城戸内の調査結果とは異なる。また、量的な差はあるものの、両調査区における出土傾向が一致することは注意すべきで、第80次調査区付近での朝倉氏遺跡の広がりをも想定することができる。なお、遺構の項でも触れたように、第76次調査区では、旧水田耕土上に盛土して現水田面としており、この盛土中から朝倉時代の遺物936点を含む955点の遺物が出土している。盛土自体は、調査地の西の山寄りから移動したもので、遺物も同時に移動してきたものと考えられ、調査地の西部における遺跡の広がりも想定することができた。

以下、この項では、第76次調査の遺物を主として扱うこととする。なお、越前焼甕・播鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』（1983）、土師質皿の分類は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』（1979）、染付の分類は「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』（小野正敏1982）によった。

器種	76次		80次		器種	76次		80次		器種	76次		80次							
	数量	%	数量	%		数量	%	数量	%		数量	%	数量	%						
日本製陶器	越前焼	甕	617		13	中国製陶磁器	青磁	碗	65		3	金属	銅	36						
		壺	167		5			皿	38		2		銭	19						
		鉢	31		2			鉢	2				釘	1						
		鉢	205		8			盤	3				刀	3						
		鉢	2					香炉	1		1		柄	7						
	小計	1,022	21.68	28	24.8	壺	1			計	66	1.4								
	瀬戸・美濃焼	鉄釉	碗	85		4	白磁	碗	小計	110	2.33	6	5.3	石製品	バンドコ	48		2		
			皿	5					皿	5		5	風		1					
			鉢	1		1			鉢	4			盤		15					
			茶入	1					香炉	2			硯		4					
壺			11			その他			1			砥石	12							
瓶	1			小計	157	3.33	5	4.4	白	1										
鉢	3			小計	178	3.78	4	3.5	その他	34										
小計	107	2.27	5	4.4	染付	碗	76		1	木製品	計	115	2.4	2	1.8					
美濃焼	灰釉	碗	32			3	器	碗	皿		95		3	下駄	1					
		皿	213						鉢		6				曲	1				
		壺	1						壺		1				漆	3				
		香炉	4						小計		178	3.78	4		3.5	加工	2			
		小計	250	5.3	3	2.7			赤	1	0.02		その他		2					
土師質	皿	小計	2,540	51	46.0	朝鮮製陶磁器	碗	5			木製品	計	9	0.2						
		土釜	26		1		土師器	壺	6				壁土	6						
		土鈴	2					須恵器	3	0.06				炭	4					
		土鉢	2					近世・その他	鉢	1						その他	2			
		土その他	3						計	12		0.25					計	12	0.25	
小計	2,573	54.57	52	46.0	土師器	20			0.42		合計	4,715			100			113	100	
土器	瓦質	香炉	3			須恵器	3		0.06			陶磁器類の計	4,513		95.7			111	18.6	
		風炉	6			土師器	近世・その他		36	0.76			6	5.3	合計			4,715	100	113
		火鉢	2				計	4,513	95.7	111			18.6	合計		4,715		100	113	100
		鉢	2		2			土師器	須恵器	3			0.06				陶磁器類の計	4,513	95.7	111
		その他	2		2				近世・その他	36	0.76		6			5.3		合計	4,715	100
小計	13	0.28	2	1.8	計		4,513		95.7	111	18.6	合計	4,715			100			113	100
瀬戸・美濃焼	珠洲焼	小計	28	0.59		土師器	須恵器		3	0.06			陶磁器類の計		4,513	95.7			111	18.6
		小計	3	0.06			土師器		近世・その他	36	0.76			6	5.3	合計			4,715	100
		小計	3,996	84.75	90			79.6	計	4,513	95.7			111	18.6		合計		4,715	100

表1 第76・80次調査出土遺物一覧

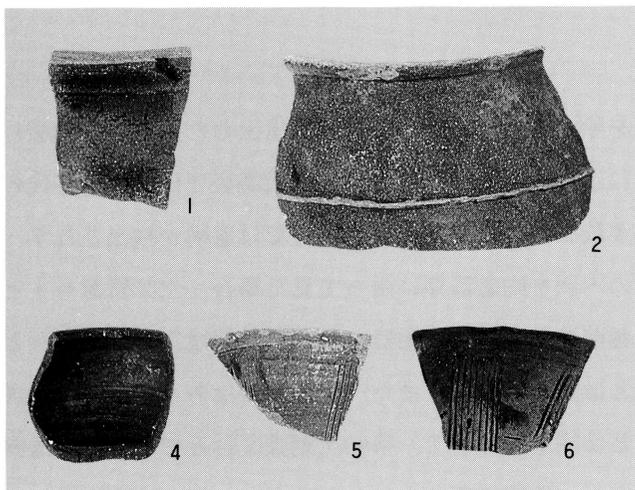


写真15 越前焼(1)

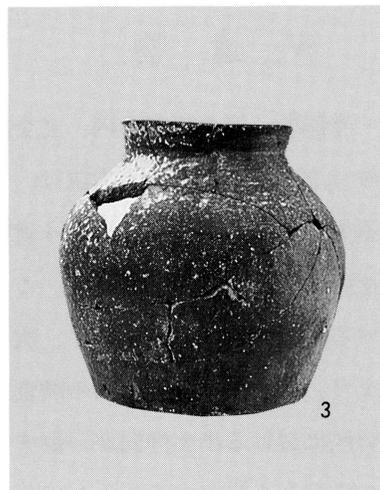


写真16 越前焼(2)

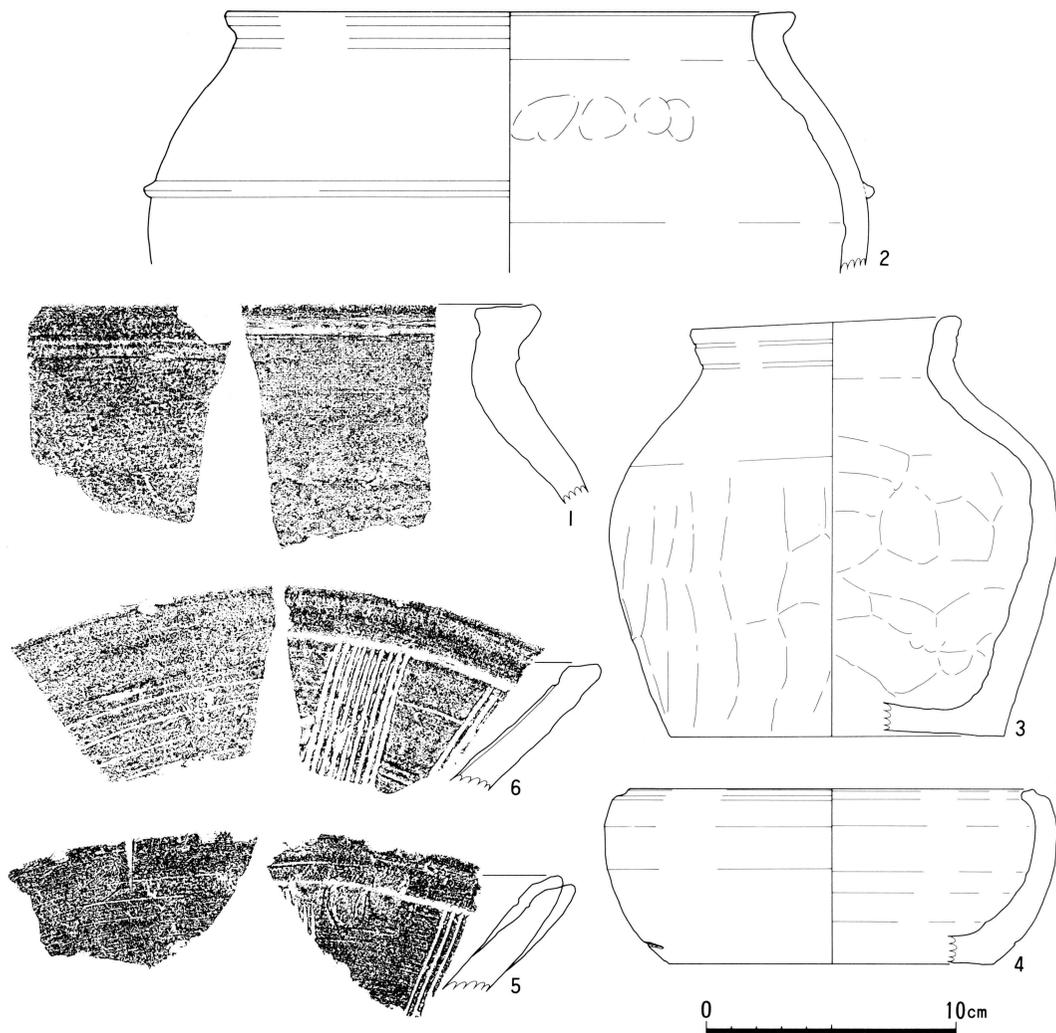


图10 越前烧实测图

越前焼 越前焼は甕が617点と最も多く、大半が(1)に代表される口縁上面が平たく肥厚した、Ⅳ群の大甕であった。壺は、167点が出土した。(2)は、短頸壺である。口縁は逆三角形を呈し、肩部のやや下がった位置に粘土紐を貼り付けた凸帯が巡る。焼きがあまり。(3)は、器高約16.7cmを測る撫で肩の壺で、胴部に最大径(約17.9cm)をもつ。堅く焼き締り、肩部には降灰の白斑がみられる。この個体は欠損部分があるので分からないが、このタイプの壺には口縁の内側に縦方向の溝をつけた片口をもち、肩部に篋記号をもつものが多い。その他、器高10cm前後のお歯黒壺なども出土している。鉢は、31点と少ない。(4)は、口縁が内湾する鉢で、復元口径約16.2cmを測る。堅く焼き締り表面はチョコレート色を呈する。播鉢は205点出土した。(5)は、片口をもつⅢ群の播鉢である。間隔の広い播目は、比較的口縁に近いところに巡る沈線まで引き上げられる。(6)は、9条単位の播目がやや広い間隔で引かれるⅣ群の播鉢である。播鉢は、壺や鉢と比べて焼きがあまりく、器表が赤味を帯びたものが多い。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は碗が多く、灰釉は皿が多い。鉄釉の碗は、大半が(7~9)に代表される天目茶碗である。(7)は、やや丸みを帯びた胴部の器壁が厚く、口縁の屈曲が弱い大窯初期の碗である。腰部の錆釉は厚く施される。(8・9)は、胴部が直線的で器壁が薄く、口縁の屈曲が強い碗である。(8)は、一旦割れた部分を漆で接合・補修して再利用している。(10)は、器高約17.7cmを測る鉄釉の壺である。肩部には、粘土紐を貼り

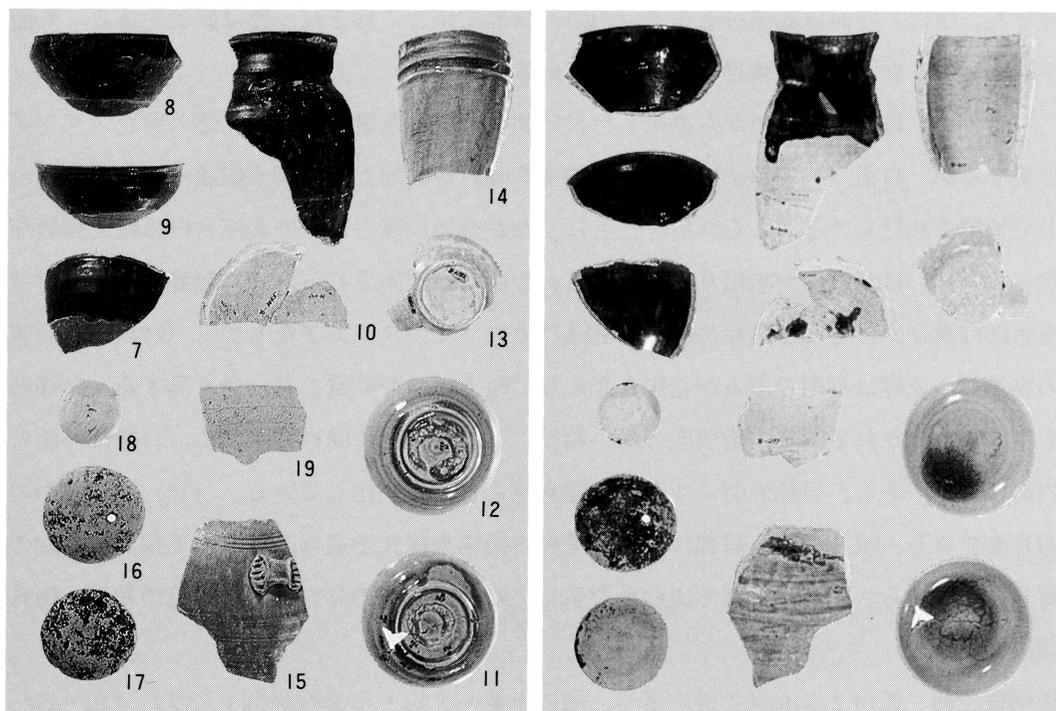


写真17 瀬戸・美濃焼、土師質土器、瓦質土器(外・内)

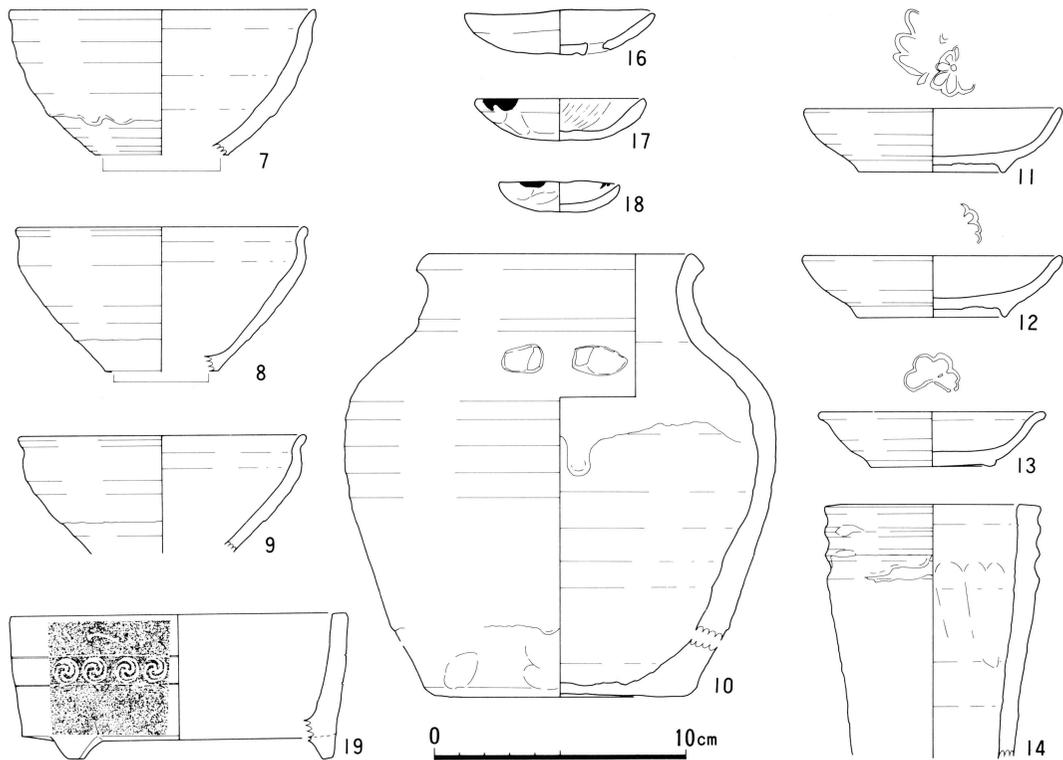


図11 瀬戸・美濃焼、土師質土器、瓦質土器実測図

付けた横方向の耳をもつが、双耳壺か四耳壺かは分からない。胎土はやや軟質で黄白色を呈する。釉は、外面は底部付近まで、内面は胴部上位まで施され、他は露胎である。外面の胴部を強くなでて、轆轤目を意匠化している。

(11・12)は、S D4102から出土した付け高台の灰釉丸皿である。見込の菊花スタンプは異なるが、口径(約10.3cm)・器高(約2.5cm)が共通し、釉調も似通っており、セットで使用されたものと考えられる。ともに、釉が全面に施され、外面高台内に輪土鎮痕が残る。(13)は、口縁が端反りの皿である。全面に釉が施されるが、外面底部の低い付け高台内は薄く、ほとんど露胎に近い。見込にカタバミのスタンプをもつ。(14)は、筒状の容器で、全容は不明であるが花生と思える。胎土はやや軟質で黄白色を呈する。口縁部を下にして焼かれており、透明度の高い釉は、下から口縁に向けて流れる。口縁部外面と内面は露胎である。口縁外側に3条の凹線を巡らせ、意匠化している。(15)は古瀬戸の四耳壺である。張りのある肩部に3条1単位の櫛描条線文を巡らせ、その下位に横方向の耳を貼り付ける。胎土は緻密で灰白色を呈し、細かい貫入の見られる灰緑色の釉は、内外面に施される。

土師質土器 皿が2,540点で最も多く、他に土釜・土鈴・土錘等が出土した。(16・17)は竈遺構S X4116の炭層から出土したC類の皿で、(16)は成形の段階で1カ所穿孔し

ている。孔の意味は不明であるが、まじないの可能性もある。(17)は、灯明皿に用いている。(18)は、S D4103から出土した口径約4.8cmの小振りの灯明皿である。成形技法からC類に分類できるが、見込みから胴部への立ち上がりは緩やかである。胎土は緻密で、黄白色を呈する。

瓦質土器 香炉や風炉、火鉢などが出土した。(19)は、復元口径約13.6cmの香炉である。ほぼ全体が素焼の肌色を呈し、口縁部が僅かに黒変する。体部に2条の沈線を引き、間に巴文のスタンプを巡らせる。

中国製陶磁器 青磁は、碗が65点で最も多く、次いで皿がその半数余り出土した。(20)は、復元口径約14cmを測る線描蓮弁文の碗である。(21)は線描蓮弁文の碗の底部である。内ぐりの浅い高台内は、重ね焼きのため釉を拭き取る。見込には印花をもつ。一乗谷で最も多く出土するタイプである。

白磁は、皿が145点で大半を占める。図示しなかったが、なかでは口縁が端反りの皿が多く、胎土が軟質で高台が割高台のさらにも多少出土した。

染付は、碗・皿ともに多く出土した。(22)は、いわゆる「饅頭心」の碗E群である。

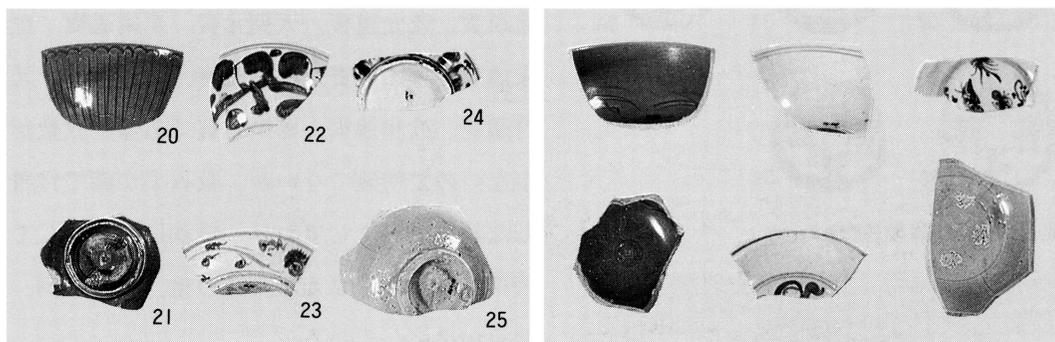


写真18 輸入陶磁器(外・内)

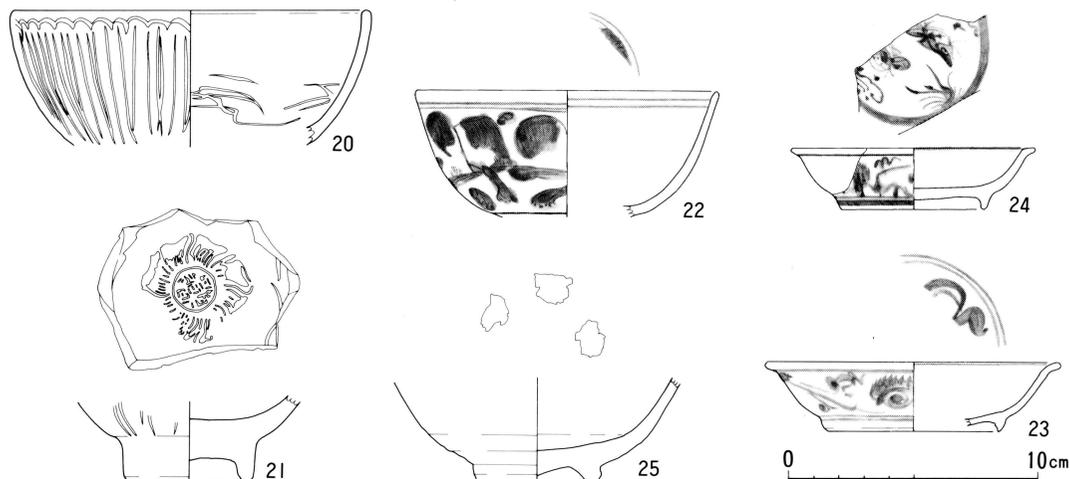


図12 輸入陶磁器実測図

外面口縁部と腰部に界線を引き、胴部に風景を描く。内面も口縁部と見込に界線を引き、見込に文様をもつ。(23)は、口径約12cmを測る、口縁が端反りのB₁群の皿である。外面胴部には牡丹唐草文、内面見込には玉取獅子を描く。底部は、高台畳付以内を露胎とする。

(24)もB₁群の皿である。口径は、約9.8cmを測る。外面胴部には牡丹唐草文、内面見込には魚草文を描く。高台は篋削りされ、畳付の脇に砂目跡が残る。

朝鮮製陶磁器 蕎麦茶碗や徳利形壺とともに白磁の碗(25)が出土している。高台は外側

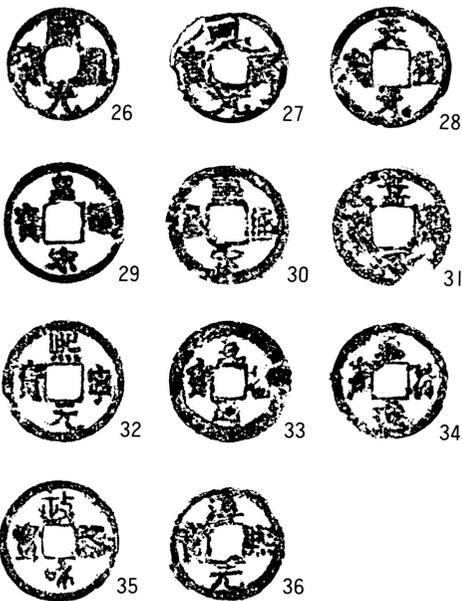


図13 銅銭拓影図(縮尺2/3)

に荒い篋削りの跡を残し、内側を丸く括る。灰白色の釉は、高台を除く全体に施されるが胎土がやや粗いためか、所々に針穴状の沸痕がみられる。高台畳付と見込に4カ所ずつある目痕は平滑に研かれる。

金属製品 銅銭が36点出土した。その内15点はS X 4116付近の炭層から出土した。銭銘の判読できるのは(26~36)の11点で、順に開元通寶、乾元重寶、天聖元寶、皇宋通寶、皇宋通寶、嘉祐元寶、熙寧元寶、元符通寶、元符通寶、政和通寶、淳熙元寶である。枚数が少ないので明確でないが、数枚ずつ鑄で付着した状態で出土しており、縵状に紐を通して使用したものと思える。この他、刀や小柄、鉄釘が出土している。

石製品 笏谷石製のバンドコ・風炉・盤の他硯、砥石等が出土した。(37)は平面がD字を呈するバンドコの蓋である。前面の幅は約

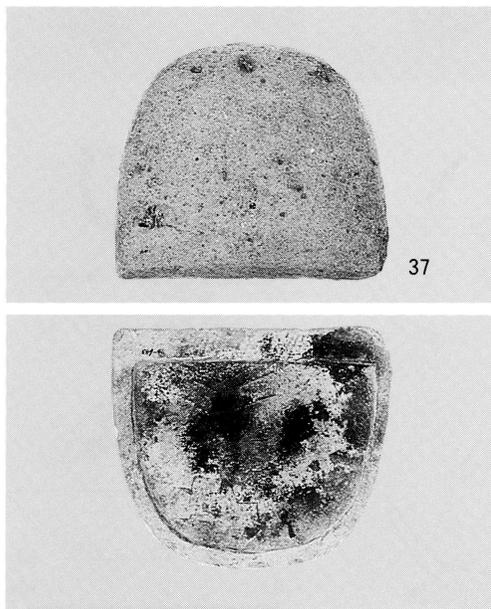


写真19 バンドコ蓋(表・裏)

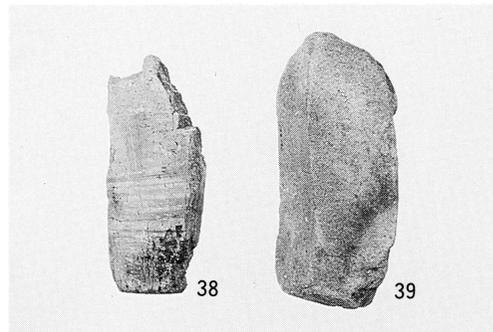


写真20 砥石

21cm、奥行き約18.3cmを測る。表は丁寧に削るが、裏面には粗いノミ痕を残す。あまり熱を受けておらず灰緑色を呈するが、裏面に黒褐色をしたタール状の付着物が見られる。(38)は長さ約17.5cmを測る角柱状の砥石である。表裏2面を使用する。表面の肌理が細かい仕上げ砥である。(39)は長さ約20cmを測る角柱状の砥石である。石材は砂岩系で肌理がやや粗く、荒砥或は中砥であろう。

木製品 下駄、曲物、漆器椀、柿経等が、調査区北部のS D4103とS X4120の間で出土した。

(40)は、口径約17cm、器高約8.8cmを測る漆器椀である。約2.3cmを測る高い高台から、腰部で大きく張った体部は、内湾気味に立ち上がる。内外面とも黒漆が塗られ、外面胴部に3つ内面見込に3つ、図示した文様が朱色の漆で描かれる。この他に2点あり、1点は口径約15.3cmを測る(40)と同器形の椀で、内面全体に朱

色漆、外面に黒漆を塗り、外面胴部に朱色漆で蓬萊文を描く。もう1点は、低い高台にやや開き気味の内湾する体部をもつ椀で、内外面とも黒色漆を塗ったうえに朱色漆で蓬萊文を描いている。

その他 朝倉時代以前の遺物として、土師器や須恵器が出土した。

(41)は、高さ約1cmの付け高台をもつ土師器椀である。(42)は、底部に糸切痕のある平底の土師器壺である。ともに9~10世紀の遺物で、耕土や攪乱土から出土している。

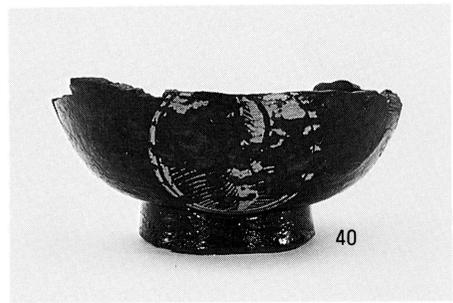


写真21 漆器椀

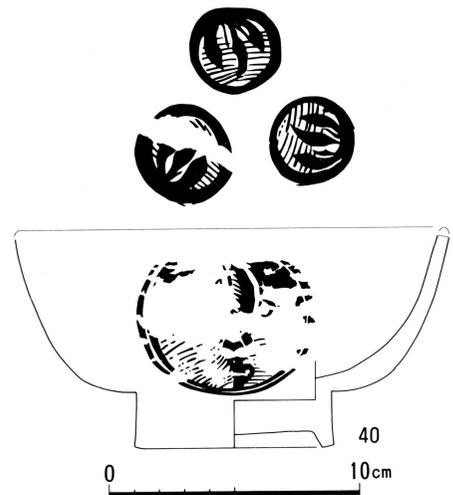


図14 漆器椀実測図

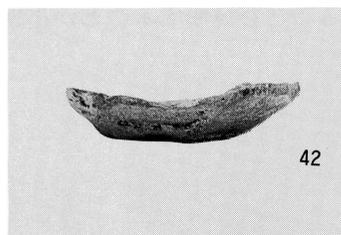
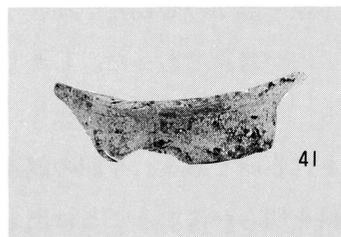


写真22 土師器

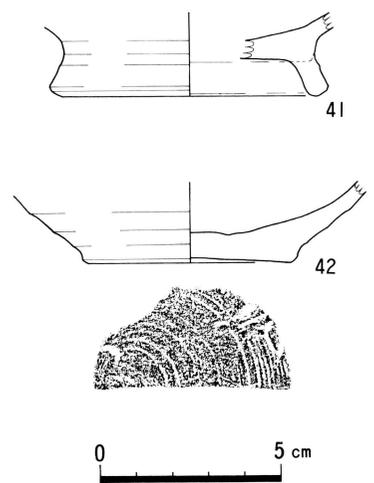


図15 土師器実測図

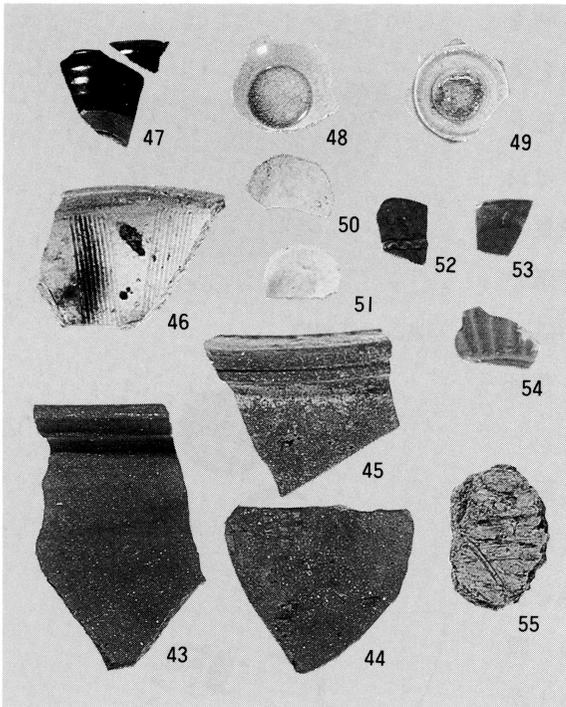


写真23 立会調査出土遺物

立会調査採集遺物 今回の発掘調査に先立つ立会調査では、コンテナバット2個分の遺物を採集した。主なものを写真23に示した

(43・44)は越前焼Ⅲ群、(45)はⅣ群の大甕、(46)はⅢ群の播鉢である。瀬戸・美濃焼は、天目茶碗(47)や灰釉皿(48・49)等があり、(50・51)等土師質皿も多数見られた。(52)は瓦質の火鉢である。中国製陶磁器は青磁碗(53)、同盤(54)の他、白磁染付類も見られた。その他、壁土(55)もあり、同調査地において朝倉時代の遺跡の存在することが明かとなった。

V. まとめ

昭和42年の調査開始以来、多くの貴重な成果を得、「実像の戦国城下町」とさえ呼ばれるようになった一乗谷朝倉氏遺跡であるが、一方で、調査の進展は、新たな課題も明らかにならつつある。本遺跡の指定地は、「城戸ノ内」と主城の中心部のみであって、周辺部も含めた、都市としての一乗谷の全体像の解明の必要性が高まっている。これまでの発掘調査は、主として指定地である城戸ノ内が対象であった。しかし、遺跡は、かなり広範囲にわたることが明らかにされ、中でも、今回の調査対象となった「安波賀」地籍は、その商業地区としての性格も含め、注目される所である。今回の調査は、極めて限定された小規模なものであって、その遺跡の性格を明らかにすることは出来なかったものの、地下には、遺構がかなり良好に残されていることを証明することが出来た。今後の本格的な面的調査の必要性が高まったといえよう。

一乗谷朝倉氏遺跡

県道篠尾・勝山線改良工事に伴う事前調査報告

発行年月日 1993年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社